



# 未来図の世界

## 小松左京

講談社

《同じ著者によって》

|               |       |         |
|---------------|-------|---------|
| 日本アパッチ族（小説）   | 1964年 | 光 文 社   |
| 復活の日（小説）      | 1964年 | 早 川 書 房 |
| エスパイ（小説）      | 1965年 | 早 川 書 房 |
| 明日泥鰌（小説）      | 1965年 | 講 談 社   |
| 地図の思想（エッセイ）   | 1965年 | 講 談 社   |
| 果しなき流れの果に（小説） | 1966年 | 早 川 書 房 |

## 未来図の世界

© Sakyo Komatsu

著 者 小 松 左 京

1966年 9 月10日 第一刷発行

発行者 野 間 省 一

発行所 株式会社 講談社

定価 390円

東京都文京区音羽町3の19

振替 東京 3930

電話 東京 (942) 1111



Printed in Japan  
落丁本・乱丁本は  
お取り替え致します

印刷所 慶昌堂印刷株式会社  
製本所 藤沢製本株式会社

# 未来図の世界 目次

# I 未来人講座

ドライとウェット

世界にむかつて口を出せ

地球は小っちゃな星だけど

めでためでたの若松さまよ

鼻毛美人誕生

性文化は貧しくなるか？

さかさに地図をながめてごらん

飢えても牛を食べない

国こわしのデザイン

不気味な不気味な宇宙時代の開幕

期待されるハイティーン像

人類あと50万年？　ようやく成熟期

69 63 57 52 47 42 36 31 25 19 14 9

バラ色の幻想より悲しい歴史を  
「弱肉強食」は人間違反だ！  
ミクロンなみの小さな人間  
「21世紀論文」への怒り

## Ⅱ 未来図の世界

廃墟の空間文明  
消えうせた怪談  
ツイてる国ニッポン  
顔のない宰相たち  
槍とヒョウタン  
サラリーマン生活・昭和75年  
あなたもスパイになれる  
テレビ文明論への試み

|               |     |
|---------------|-----|
| 何がワイセツ文学か     | 195 |
| 貧しい本棚         | 199 |
| 私の小説作法        | 208 |
| 高橋和巳の姿勢       | 211 |
| テレビドラマへの期待    | 215 |
| SFはかぐや姫の昔から   | 218 |
| SFの積極的意義      | 223 |
| SFのバカバカしさ     | 227 |
| 拝啓イワン・エフレーモフ様 | 231 |
| 第二次航海時代       | 255 |
| 一千百万人の恐怖      | 261 |
| 万国博はもうはじまっている | 265 |

未来図の世界

小松左京



# 未来人講座



## ドライとウェット

のっけから、お茶屋遊びのはなしで恐縮ですが、つい最近、私は、友人の作家にさそわれて、彼の行きつけの、京都のお茶屋に行きました。

ことわっておきますが、私は、お茶屋などという所へは、めったに行きません。——私程度の収入では、自前でのめる所といえは二流のバーがせいぜいだし、編集者の社用で歓待されるのが、大きらいな方ですから、自然、そんな所になじまないのです。

ですが、その時は、その古い友人に、ひさしぶりで二人きりであい、ひさしぶりにのんだので、彼にさそわれるままに、小さなお茶屋へ行きました。そこで、別になじみでもなんでもない、芸妓を一人だけ、よんでもらいました。——きれいに盛装した、近代的な顔だちの、ほんとうにういういしい芸妓でした。きけば、舞妓はんから一本だちになって、まだ一週間しかたない、ということ、年齢も、去年、選挙権を得た所だといいますから、まだ二十一でしょう。——いそいで髪をととのえてきたので、島田のかつらがいとうてかなわんわ、とぼやく所も、まだ舞妓気分がぬけていないようで、ほほえましい感じでした。

夜もかなりふけていましたし、私も友人も、その前にだいぶ酒がはいっていたので、そこでは銚子<sup>ちやうし</sup>二、三本におつまみ程度で、ごくしずかに四方山<sup>よもぎ</sup>ばなしにふけり、あいの手にその妓<sup>こ</sup>のお相手をしてやるような恰好になったのですが——そのうち、その若い芸妓はんが、つい半年ほど前、みずから終止符をうったという、恋の話をしはじめたのです。

——その妓の話は、古い伝統と格式のある、京都の花街に、昔からよくあるような話でした。その妓は、十五の年に舞妓はんになり、十六の年、東京からあそびにきた、プレイボーイの多い、私立のK大の学生と恋におちました。学生は、三つ年上とかいっていましたが。——恋におちた、といっても、もえ上ったのは、彼女の方らしい。しかし、学生の方も、それ以来、たびたび東京から足をはこび、あるいは電話をかけてきました。彼女は、しきたりのきびしい祇園<sup>ぎおん</sup>の社会の中で、せいっぱい十六の恋を、もえ上らせたのです。

学生は関東の素封家<sup>そほうか</sup>の息子でしたが、親がかりの身ではあり、一流地の舞妓はん<sup>まぎはん</sup>に、そうたびたび、お座敷をかけられるわけはありません。——そこで、十六の彼女は、玉代<sup>ぎよんだい</sup>をたびたび自分で負担しました。のちには、貸席料さえ、自分ではらい、いろんなものをプレゼントしたりしました。そのため、ふだんの日は、同輩たちの出かける遊びや、舞妓らしいお洒落も、じっと我慢し、たびたびよそのお客のお座敷をぬけ出すので、「おかあはん」には、にらまれながら、その学生との逢う瀬にそなえました。お座敷の間があくと、東京に電話し、こちらから旅費を送ってきてもらいさえました。

——学生は、時に友人をさそってきて、そのつけを彼女に負わせることさえやりました

が、彼の、男としてのつきあい、仲間への自慢を考えれば、そのくらいのことは当然と、彼女は思っていました。また、その東京のブレイ学生が、自分に惚れている遊里の少女のことを、仲間に、どういう具合に——所詮、くろうとだといった若干の蔑視を根底において——吹聴ふいちょうしているかということも、かしこい彼女はちゃんと知っていました。

「そやけど……」と彼女は、淡々と言いました。「お友だちに、どないお言いやしても、こちらの女としての——人間としての実じつやまことはきつと通じると、そう思うてましたんどっせ……」

こんなことが三年つづき、そのうち卒業がちかづいて男の足が遠のき、彼女はみずから東京へ彼をたずねました。——駅にむかえにくるといつていたのが、急に都合が悪くなつたから、という電話で、彼女は自腹を切つて、東京から埼玉まで、タクシーを走らせたのです。その実家で彼女をむかえた男の、かすかな狼狽が、彼女に「身をひく」決心をさせました。彼女は自分の手で、恋に終止符をうったのです。

「そやけど、もし結婚してたら……」と彼女は熱をこめていいました。「私は表に絶対出んと、旦那はんをあくまでたてて、家の中では、とことん、つくしてあげて、絶対にええ奥さんになって、女の道をつくすつもりでしたんどすえ」

——私と友人が、その京の色里らしい話に、陶然と酔いのまわつたような気分になつたのは、いうまでもありません。と同時に、私は、そのいじらしい、なりたての芸妓の、「女としての気魄」のようなものにうたれて、やや愕然としました。

それは、幼い時からたたきこまれた踊りの手が、ピシリときまるように、泥くさいメロドラマ調の浮き上りや、幼いつけやき刃といったものを全然感じさせませんでした。むしろ、累代<sup>るだい</sup>みがきぬかれた「女の生き方」の伝統のようなものを、つきつけられた気がしました。そして——私が愕然となったのは、彼女が二十一歳で、まぎれもない、戦後の子である、という所にあったのです。

もうすっかり古くなつた言葉ですが、一時の流行語でいえば、彼女の生き方は、「ウェット」の極致といえるでしょう。——どこまでも男をたて、影のような存在に甘んじながら、とことん男につくす。この古い忍従の見本のような女性の生き方は、それこそ戦後の考え方で行けば、自ら女性の人権をおとしめることであり、自ら屈辱的、奴隸的な人間蔑視を实践することにはかならないと、評価されるでしょう。ドライということからは、男も戦後の「男女平等」に、大いに利得を得ているわけで、そこまでせまられた相手の男が、若干辟易したのも、わからないではありません。

しかし、考えてみると、男女平等、功利主義、セックスの享樂化など、戦後の「ドライ」な男女関係の中からは、こういった戦前的、あるいは前近代的な、ウェットな男女関係にふくまれている人生的、人間的な、すごみのようなものは、うまれてこないのではないでしょうか？

——そして一方、戦前的なものは、時代がかわつたから、完全になくなつたのではなく、時代シンボルの有効な転換期がすぎて、ふたたび時代をこえた価値シンボルが有効と

なった時、また復活してくる可能性が充分あります。私が少々危惧を感じたのは、戦後の「ドライ」が、戦前の「ウェット」と一対一で対決した時、前者のやや根の浅い浅薄さが、後者の根の深いすこみや、迫力に、一たまりもなく粉砕されてしまうのではないかと、ということでした。

私は、ややとうがたってますが、これでも戦後派のはしくれです。したがって、ドライ派に絶対にくみます。しかもなお、私自身が、より進歩した人間関係と思うドライで、平等で、民主主義的な人間関係を、保持して行くためには、単にそれをまもって行くだけでは、具合が悪いと思っています。——じっとしていれば、すこみのあるウェット派にくみしかれ、ドライ派自体が、ウェット派に大量に転化して行くかも知れません。そうなたら、またぞろくりかえしです。そうならないためには、ドライ派自体が、自己の浅薄さを克服するために、古い伝統のもつすこみを理解して、そこから、ドライで民主的な基本関係を保持しつつ、さらにそれをこえるような、新しい人間関係をつくり出して行かねばなりません。——私の考えている「未来人」とは、単なるくりかえしの明日や、うけ身の時代進行をのりこえるような、新しい、より高い次元の世界の中にうまれてくる人間であり、またそれをうみ出して行くような人間であります。

## 世界にむかって口を出せ

もっとつづくのかと思って、たのしみに見ていたら、わずか二回でおわってしまいました。が、ついこの間、あるテレビ局の「これが世界だ」という外国番組の中で、世界の五ヵ国をつないだ、五元同時中継の「アメリカにきく」という企画がありました。

日本では、フィルムにとったものを、放映したのですが、実際には、大西洋をはさんだ両大陸を通信衛星でむすんで、同時中継したものだそうです。——これはまことに、画期的な番組で、ヨーロッパ側は、ユーロビジョンという、ヨーロッパ全部をむすぶテレビネットワークを通じて、ロンドン、パリそれにユーゴのベオグラードが同時にむすばれ、新大陸は、CBSのネットワークを通じて、メキシコシティとワシントンがむすばれました。この二つの大陸の電波は、大西洋上三万数千キロの宇宙空間にうちあげられた「通信衛星会社」という民間会社の「アーリー・バード」という定点通信衛星（これは二十四時間地球を一周する人工衛星で、地球の自転周期と公転周期が一致するため、地上からは宇宙の一点に制止しているように見え、電波中継に便利です。オリンピックのテレビの海外中継につかわれた、アメリカ航空宇宙局のシンコム衛星もこの仲間でした）によって字